

# 「自己愛的甘え」と怒り・攻撃行動についての一考察

## A Consideration on the Relation Between Narcissistic Amae, Feelings of Anger and Aggressive behavior

稲垣 実果

INAGAKI, Mika

### I. はじめに

怒り・攻撃行動との関連が指摘されている人格特性の一つに自己愛がある。小塩 (1998) による自己愛傾向の下位尺度 (自己愛人格目録; Narcissistic Personality Inventory; NPI) のうち、注目賞賛欲求と怒りの感じやすさ・攻撃性との関連を指摘する研究もある (阿部, 2006; 日比野・湯川・小玉・吉田, 2005等)。また、相澤 (2002) は自己愛的人格項目群において7因子を見出したが、その中に自己愛的憤怒という怒りに関わる因子が存在することを明らかにしている。

以上のような、自己愛と怒り・攻撃行動に関する研究のほかに「自己愛的甘え」と怒りとの関連を実証的に検討している研究もある (長澤・齋藤, 2011)。「自己愛的甘え」とは、満たしてくれない他者に対して一方的に「甘え」を要求する自己愛的要求を伴うものであり、土居 (2001) の自己愛と甘えに関する指摘を基に稲垣 (2007a) によって提唱された。

本研究では「自己愛的甘え」と怒り・攻撃行動との関連の可能性について、様々な文献を基に理論的に検討する。さらに、現代人の怒り・攻撃行動としてモンスター化現象と境界性人格障害を取り上げ、「自己愛的甘え」との関連を理論的に検討・考察する。

### II. 怒りの仕組みと自己愛的甘えとの関連

#### 1. 怒り・攻撃行動の仕組みと分類

怒りは、個人の内的経験だけではなく、それを表すことによって様々な対人的影響を引き起こす感情といえる。湯川 (2008) は、怒りを「自己もしくは社会への、不当なもしくは故意による (と認知される)、物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態である」と定義している。また、岡野 (2014) は、怒りが起きるメカニズムとして、自分のプライドが傷ついたことによる心の痛みから始まるとし、その次の瞬間に自分のプライドを傷つけた (と思われる) 人に向かう激しい怒りへと変わると述べている。Tangney (1995) は、怒りは恥の感情に対して二次的に生じてくるものであるとし、二次的感情としての怒りという見方を示した。

怒りに付随する行動として攻撃行動がある。Baron & Richardson, D. R. (1994) は、攻撃行動を「危害を避けようとしている他者に対して、危害を加えようとする行動」と定義している。Buss (1961) は攻撃行動の種類を以下のように述べている。文句を言う、悪口を言う「攻撃的行動」と、殴る、たたく、蹴る「身体的行動」という軸による分類や、攻撃対象に直接向けられた行動による攻撃で

ある「直接的攻撃」か、落とし穴を掘る、悪いうわさを流すなど、周囲の環境や他者に対して向けられた行動による攻撃である「間接的攻撃」かによって分類することもできる。

さらに、自己愛傾向に関わる最も重要な観点に、攻撃行動の意図内容に沿って分類される「道具的攻撃」と「敵意的攻撃」がある。道具的攻撃とは何らかの目的を達成するために、手段として攻撃をすることである。この道具的攻撃はさらに、「強制（自分の思い通りにする為、言うことを聞かせるために攻撃する）」「防衛（身を守るために仕方なく攻撃する）」「印象操作（「強い」「怖い」自分を見せつけるために、怒りは感じていなくても、あえて他者を攻撃する）」「制裁（集団の秩序を保つために、逸脱者に対して見せしめとして罰を与える）」などに分類される（大淵，1993）。敵意的攻撃とは、怒りを伴う感情的な攻撃であり、「腹が立ったから仕返すする」「どうしても許せないから文句を言う」などがある。

また、性格特性として攻撃性との関連が指摘されている認知スタイルに敵意的帰属スタイル（Krahe, 2001）がある。敵意的帰属スタイルとは、他者の悪意を読み取りやすい傾向のことであり、他者の行為によって被害を受けた際に敵意的帰属スタイルの高い者は、相手の過失ではなく悪意によるものと考えやすい為、その復讐として、より攻撃的に反応しやすいことが指摘されている。

## 2. 自己愛的甘えと怒り・攻撃行動

岡野（2014）は、怒りの背後には自己愛の傷つきがあると述べている。そして、一つの連続体として自己愛を考えると、中心に健全な部分（健全な自己愛；自分の身体が占める空間、衣服や所持品、安全な環境）を持ち、周囲に病的に肥大した部分（偉い、強い、優れた、常に人に注意を向けられて当然という自己イメージ）を持つと考えうるとしている（図1）。

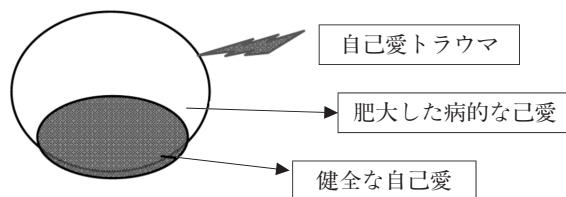


図1 自己愛の連続体（岡野，2014）

このように考えた場合、健康な自己愛が侵害された際には、自己保存本能に基づいた正当な怒りが生じ、これは一次的な感情としての怒りであると述べている。また、病的に肥大した自己イメージが侵害された場合には、破壊的な怒りが生じ、これは恥が先立つ二次的感情としての怒りであると指摘している。怒りや攻撃性は、人間関係に対して必ずしも否定的な影響を及ぼすものばかりではない。阿部（2002）、Averill（1982）は、怒りを表出したことで、それまでよりも相手との関係が親密になったり、問題が解決したりする場合も多いと指摘している。ただ、怒りの表出が肯定的に働くためには、怒り表出の正当性評価が対人的効果を左右する中心的な要因となることが明らかになっている（阿部・高木，2005）。正当性評価とは、「あの人が怒るのは正しい」「当然だ」または「こんなことで怒るなんておかしい」「怒るべきではない」といった規範的な判断のことである。そして、怒りが「正当」と判断されたときには、その怒りに対して謝罪等が行われ良好な対人的効果が生じやすくなるが、反対に怒りの表出が不当なものとなってしまうと元の怒り手に対して怒りを表出し、怒りの悪循環と共に否定的な対人的効果が生じる（阿部，2011）。

阿部（2006）は、自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響について検討している。ここでは、

自己愛傾向として小塩（1998）による自己愛傾向の下位尺度（自己愛人格目録；Narcissistic Personality Inventory；NPI）である3因子（優越感・有能感，注目賞賛欲求，自己主張性）を使用し，3因子との関連についても検討されている。その結果，優越感・有能感の高い者は「自分は特別な存在だから何をしてもよい」という尊大さによって，正当性を高く評価しがちだということが示された。一方，注目賞賛欲求が高い者ほど，被害状況に対して敏感に反応し，怒りを感じやすいことを明らかにした（図2）。

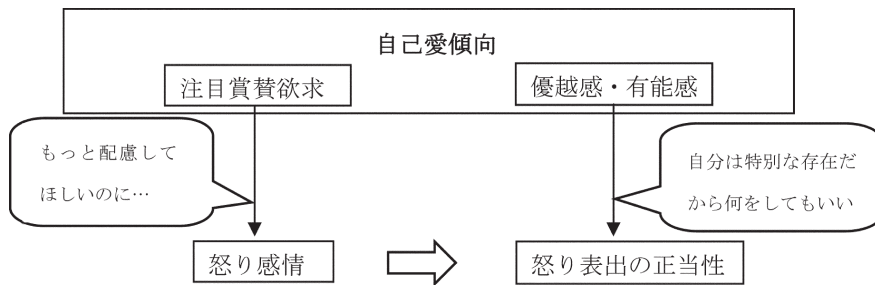


図2 自己愛傾向と怒り表出の正当性との関係（阿部，2011）

Bushman & Baumeister(1998)は，自己愛傾向の高い者は，自己評価が非常に高いにも関わらず，それを支える明確な理由や根拠がないために，些細な出来事が自尊感情を低下させる原因となり，自我への脅威を感じやすいと述べている。そしてその結果，自己愛傾向の高い者は，自己防衛としての攻撃行動をとりやすいと指摘している。Baumeisterは，このようなメカニズムを「自己本位性脅威モデル」とした。阿部（2011）も述べるように，このような人々は「自分は特別な人間だ」「素晴らしい人間だ」と思っているものの，「なぜ特別か」「なぜ素晴らしいのか」という問いに対しては明確な答えを持っておらず，そのため，常に他者からの評価に対して敏感で，普通なら気に留めないようなちょっとした一言でも傷ついてしまい，自己評価が大きく揺さぶられる。そして，傷つきやすさに対する防衛として，「もっと配慮してくれたらいいのに」「そんなことをするなんて信じられない」という気持ちから怒りを感じ，攻撃的な行動に出るといえる。

さて，稲垣（2007a）は，土居（1971）の提唱した不健康で「屈折した甘え」を含む，「自己愛的甘え」の存在を示している。稲垣（2007a）によれば，「自己愛的甘え」は『「甘え」が満たされず，甘えたくとも甘えられないがゆえに，一方的で要求がましい自己愛的要求を伴う『甘え』』と定義される。これは自己愛のある種の誇大性を含みつつ，過敏性に近い特徴を示すものであり，下位尺度として3因子（「屈折的甘え；甘えたいのに甘えられないがゆえに，他者に素直に甘えを向けることができず，一方的でゆがんだ形態をとる甘え」「配慮の要求；他者に対して自分に特別な配慮を向けてくれることを要求し，周囲がその要求に応じないと不満を感じる傾向」「許容への過度の期待；周囲の人々から許容されるであろうという過度の期待を持つ傾向」）がある。さらに，この「自己愛的甘え」における自己愛は受身的対象愛（対象に愛されたいと思う心）に関係しており，このような自己愛の中心的な問題として，十分愛してくれない，満たしてくれない他者や，言うとおりにしてくれない他者への不満や怒りを伴うといった特徴がある（土居，2000；Balint，1952；稲垣，2007a）。長澤・齋藤（2011）は，怒りの感情生起と個人特性との関係についての実証的研究として，稲垣（2007a）の「自己愛的甘え」傾向と相手の意図が不明な否定的感情表明に対して感じる怒りの強さとの関連を検討している。その結果，友人から否定的感情が向けられたときに怒りを感じる強さには，「自己愛的甘え」のうちの「配慮の要

求」との関係性が見出された。「配慮の要求」には脆弱性やある種の特権意識、誇大性といったものが含まれている。長澤・齋藤（2011）は、このような「配慮の要求」傾向を有する者は、相手から向けられた不快事象に対し、その意図性を問わず強く怒りを喚起するという一方で、そこには意図知覚が影響を与えていないことを示す結果が得られたと述べている。

稲垣（2007a）によれば、「自己愛的甘え」の3因子は、全てにおいてNPIの注目賞賛欲求と有意な正の相関を示すことが明らかになっている。阿部（2006）は、小塩（2001）がNPIの下位尺度のうち、注目・賞賛欲求は自尊感情の変動性と関連する次元であると明らかにしていることから、自己愛傾向の中でも注目賞賛欲求が最も「自己本位性脅威モデル」に当てはまりやすい可能性を指摘している。また、谷（2006）は、自己愛人格尺度（Narcissistic Personality Scale；NPS）と「自己愛的甘え」との関連を検討した結果、「自己愛的甘え」における「屈折的甘え」や「配慮の要求」は、「自己愛性抑うつ」や「自己愛的憤怒」といった自己愛の過敏性と主に関連を持つことを指摘している。さらに、「自己愛的甘え」における「許容への過度の期待」は「自己主張性・自己中心性」や「有能感・優越感」などの自己愛の誇大性と関連を持つことに加えて、「自己愛的憤怒」とも中程度の相関がみられることを明らかにしている。

以上のように、対象関係・関係性のなかでの誇大性としてあらわれる「自己愛的甘え」は自己愛の過敏性と誇大性両者をとらえるものであり、「自己愛的憤怒」といった怒りの感情と関連をもつ。さらに、「自己愛的甘え」は、「自己本位性脅威モデル」のような自己評価が非常に高いにもかかわらず、些細な出来事が自尊感情を低下させ、自己防衛として攻撃行動を伴う怒りの感情とも関連性があると考えられる。「自己愛的甘え」と関連する怒りの感情というのは、このような自己評価が大きく揺さぶられた際の防衛手段として「もっと配慮してほしい」「自分にそのような仕打ちをすることは信じられない」といった気持ちを伴うといえるのではないだろうか。また、「自己愛的甘え」に関連する怒りの感情は、岡野（2014）の述べる病的に肥大した自己イメージが侵害された際に生じる二次的感情としての怒りであると考えられる。

### III. 現代人の怒り・攻撃行動と「自己愛的甘え」

#### 1. モンスター化現象にみられる怒り・攻撃行動と「自己愛的甘え」

近年、モンスター化現象があらゆる場面で見受けられ、社会的な問題となっている。学校・病院・企業等においてしばしばみられる無理難題の押し付けは、どのような現象として説明できるだろうか。モンスター化現象は、嶋崎（2008）が述べるように現代人の未熟さや他罰性を原因とした「未熟なパーソナリティ説」として議論されることが多い。一方で岡野（2014）は、現代のモンスター化現象は社会の変化がそれを許容するような培地を提供していると述べており、「クレイマー社会は被クレイマー社会でもある」と表現している。また、ここ20～30年で日本社会では自分の権利を主張することの重要性が強調されるようになってきているが、主張される側がそれに対して戸惑い、結果として主張する側がエスカレートするという事態が生じていると説明している。さらに岡野（2014）は、このモンスター化現象は日本人の「おもてなし」とも関係していると述べており、モンスター化している人々は、このような本来受けるべき「おもてなし」のサービスを受けさせてもらえないことからくる自己愛的な傷つきに反応している可能性があるという指摘している。

さて、モンスター化における怒りや攻撃性を上述のようにとらえるならば、これは現代人の「自己愛的甘え」の問題と捉えることもできるのではないだろうか。人間関係の中で愛されたい欲求すなわち甘

えの欲求が満たされていない場合、自己愛的な一種の精神的弱みや欠乏状態が起こる。そのため、十分満たしてくれない相手に対して自己愛的な傷つきが起こりやすく、不満や怒りがエスカレートするとも考えられる。モンスター化現象が蔓延する社会では、立場によって自身がクレイマーにも、被クレイマーにもなりうる。クレイマーもまた、自身が他者のクレームによって既に被害を受けている場合やいつ無理難題を言われてもおかしくない状況にある可能性が高い。このような自己愛的傷つきを受けやすい心理的状况の中で「おもてなし」のような特別な配慮が受けられない場合、心理的安定や自己評価を保てないという脆弱性ととも、ある種の特権意識や誇大性を伴い、「モンスター化現象」がエスカレートすると考えられる。これは、まさに稲垣 (2007a) が提唱した、心理的安定や自己評価を維持する機能の脆弱性である自己愛的脆弱性を背景に持つような、自己愛的要求を伴う『甘え』である「自己愛的甘え」の現象であるともいえる。

## 2. 境界性人格障害にみられる怒り・攻撃行動と「自己愛的甘え」

境界性人格障害とは、衝動性の強さが特徴として挙げられ、一方で自立ができず依存性が強く、見捨てられ感の強さを伴う人格障害である。町沢 (2004) も述べるように、近年、日本においても臨床上多く見られるようになってきた人格障害であり、凶悪犯罪や反社会的行動との関連が指摘されることも多い。DSM-IV-TR の診断基準には、「愛情欲求が強いために、愛情対象が自分から去ろうとすると、異常なほどの努力や怒りを見せる。」「相手を理想化したかと思うと、こき下ろしてしまうといったように、人に対する評価が極端に揺れ動くので対人関係が非常に不安定。」「不適切で激しい怒りを持ち、コントロールできない。そのため、物を壊したり、人を殴ったりといった激しい行動を起こす。」等がある。境界性人格障害の対人関係は非常に不安定であり、喧嘩や争いといった攻撃行動が絶えず、自分や相手を傷つけたりすることも多い。このような特徴は関係性の病理であるともいえ、その背景には、人が自分に愛情をくれない、人が自分をほめてくれないということになると、大変な怒りが見られるという問題がある。

以上のように、境界性人格障害の怒りや攻撃性の根本には、愛情欲求や依存性を一方的に要求するという、関係性の中であらわれる「自己愛的甘え」の問題がはらんでいる可能性がある。「自己愛的甘え」には水田 (1999) の述べる甘えの二重性 (分離事実の否定の二重性) を持つことができないという特徴があり、「甘え」と「あきらめ」が両立不能になっており、分離に対する過度の否定や幻想的・万能的な対象へのイメージを持つ傾向がある (稲垣, 2007b)。祖父江 (2015) は、境界性人格障害の患者に対しては、対象への恨み・つらみの裏側に、どのような対象への希求性、すなわち愛情がスプリットされているのかをみる視点が大切になると述べている。これらのことから、境界性人格障害の怒り・攻撃性を理解するにあたり「自己愛的甘え」の視点から検討することが有効であると考えられる。

祖父江 (2015) は、境界性人格障害にみられる対象の理想化には、自己側のところが涸渇化するという「自己貧困化」の問題があると述べている。つまり、理想化が進めば進むほど、自己判断や志向を放棄し、対象に預けてしまう性質が強くなり、自分で感じたり考えたり判断したりする自我機能が停止するという病的事態が起きるといえる。そのため、境界性人格障害の治療においては、理想化が強まってきたときにこそ、セラピストはクライアント自身の感じ方や考え方を問う必要がある。土居 (2000b) は精神療法の場合における患者の変化の検討から、患者は甘えたい衝動に駆られながら、それを満足させることが許されないという窮地に追い込まれており、「自分」の意識と「甘え」の危機の間には、密接な関係があると述べている。そして、「甘えたい心」を十分に理解しながら、なおかつ甘えることに没することができないと悟ったときに、初めて「自分」の意識 (自己の表象を所有しており、自信や自尊心

を伴った成熟した自我意識が芽生える（土居，2000b）としている。このように、「甘え」の危機から「自分の意識」という「自己愛的甘え」を克服する変化の過程において、「甘えたい心」の自覚は必要不可欠な心理的課題である。境界性人格障害の患者においても理想化にみられる「甘え」の意識化や、その危機・葛藤から脱するために、セラピストによって支えられながら「自分の意識」の芽生えを促すことが必要であると考えられる。また、そのような関わりが境界性人格障害にみられる極端な怒りや攻撃性を昇華させ、患者自身がそのような感情を自身で適切に処理し、抱えることを可能にさせるのではないだろうか。

#### IV. おわりに

本論文では、怒りの仕組みと「自己愛的甘え」との関連を検討し、さらに現代人の怒りと攻撃行動のなかからモンスター化現象と境界性人格障害を取り上げ、その背景にある問題を「自己愛的甘え」の観点から理論的に考察した。今後の課題としては、これらの理論的考察を検証するような実証的研究を行う必要があるであろう。そのうえで、「自己愛的甘え」の問題と関連した怒りや攻撃性を、どのように適応的に処理することができるのかといった問題解決的な視点についても、検討の余地があると考えられる。

#### 【引用文献】

- 1) 阿部晋吾 (2002). 怒りの表出経験と被表出経験—調査概況— 人間科学 (関西大学大学院社会学研究科), 57, 61-74.
- 2) 阿部晋吾・高木 修 (2005). 怒り表出の対人的効果を規定する要因—怒り表出の正当性評価の影響を中心として— 社会心理学研究, 21, 12-20.
- 3) 阿部晋吾・高木 修 (2006). 自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響 心理学研究, 77 (2), 170-176.
- 4) 阿部晋吾 (2011). 自己愛と攻撃・対人葛藤 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学 金子書房 Pp. 167-183.
- 5) 相澤直樹 (2002). 自己愛人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.
- 6) Averill, J. R. (1982). *Anger and aggression: An essay on emotion*. New York: SpringerVerlag.
- 7) Balint, M. (1952). *Critical notes on the theory of the pregenital organizations of the libido: Primary love and psycho-analytic technique*. London: The Hogarth Press.
- 8) Baron, R. A. & Richardson, D. R. (1994). *Human aggression* 2nd ed. New York: Plenum Press.
- 9) Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.
- 10) Buss, A. H. (1961). *The psychology of aggression*. New York: Wiley.
- 11) 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 12) 土居健郎 (2000a). 土居健郎選集2 「甘え」理論の展開 岩波書店
- 13) 土居健郎 (2000b). 土居健郎選集1 精神病理の力学 岩波書店
- 14) 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂
- 15) 日比野 桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因—自己愛と規範の観点から— 心理学研究, 76 (5), 417-425.
- 16) 稲垣実果 (2007a). 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究 パーソナリティ研究, 16, 13-23.

- 17) 稲垣実果 (2007b). 自己愛的甘えと自己愛的対人態度・一体感願望について 神戸大学発達・臨床心理学研究, 6, 1-9.
- 18) Krahe, B. (2001). *The Social Psychology of Aggression*. Hove: Psychology Press.
- 19) 町沢静夫 (2004). 関係性の病理を持つ青少年の実態とその内容 関係性の病理の諸相 境界性人格障害 伊藤美奈子・宮下一博 (編) 傷つけ傷つく青少年の心 北大路書房 Pp.67-74.
- 20) 水田一郎 (1999). 青年期患者と甘えの二重性 北山 修 (編) 「甘え」について考える 星和書店 Pp.147-161.
- 21) 長澤里絵・齋藤 勇 (2011). 怒りの感情生起と個人特性の関係についての実証的研究—否定感情表明と自己愛的甘えに焦点を当てて— 立正大学心理学研究年報 (2), 61-71.
- 22) 大淵憲一 (1993). 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学— サイエンス社
- 23) 岡野憲一郎 (2014). 恥と「自己愛トラウマ」—あいまいな加害者が生む病理— 岩崎学術出版社
- 24) 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究—性役割との関連— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), 45, 45-53.
- 25) 小塩真司 (2001). 自己愛的傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動制に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- 26) 鳴崎政男 (2008). 学校崩壊と理不尽クレーム 集英社新書
- 27) 祖父江典人 (2015). 対象関係論に学ぶ心理療法入門 誠信書房
- 28) Tangney, J. P., Fischer, K. W. (1995). *Self-Conscious Emotions. The Psychology of Shame, Guilt, and Pride*. Guilford Press.
- 29) 谷 冬彦 (2006). 自己愛人格と自己愛的甘えに関する研究 日本心理学会第70回大会発表論文集, 22.
- 30) 湯川進太郎 (2008). 怒りの心理学—怒りとうまく付き合うための理論と方法— 有斐閣